

ベンガルデルタの村落形成についての覚え書

河合明宣,* 安藤和雄*

The Formation of Settlements in the Bengal Delta

Akinobu KAWAI* and Kazuo ANDO*

From our major findings based on a field survey and a study of revenue records, the concept of 'settlement form', which involves the two notions of a territorial unit with a distinct geographical boundary, and the nature of community formation defined by the settlement pattern, is identified as the analytical key to understanding the agrarian social structure in Bangladesh. The *para* is the unit in this sense.

There is, unfortunately, a wide gap between the development administrative centre and the location for development, that is, the 'village'. For ordinary villagers, officials of local govern-

ment at the district, upazila and union level and officials of BRDB (Bangladesh Rural Development Board) are still total strangers.

The linkage of 'village' to centre does not work, not only because of lack of enthusiasm on the part of local government officials, but also because of administrative deficiency, with nobody officially representing the 'village' at the union and upazila parishad.

The better administrative linkage of 'village', namely, *para*, to centre does work, the more *para* society consolidates for rural development.

はじめに

バングラデシュにおいては農村開発に関する様々なプロジェクトが実施されてきた。特に1960年代東パキスタン時代に始まったコミラ方式と呼ばれる農業協同組合活動を中心とした農村総合開発は有名である。しかし多くの農村開発計画がどれほど成果を上げているかは疑問である。農村開発計画が当初の目的を達成しえないでいる問題点については様々な説明がなされている。多くの研究例が示しているように農村内の階級分化、権力構造の視点からこの問題が考察されてきた。しか

し、本稿で取り上げるベンガル農村が持つ集団としての組織性については少数の研究 [Barman 1988; Jansen 1987等] を除き看過されてきた。

筆者らは、1986年より農村調査に従事してきた。その過程で接触したベンガル農村の集落景観や村人の日常生活の広がり等に関する経験的知識によって、現在地方行政がその末端の単位としているモウザ（英領期に導入された地租行政上の最小単位、後述）またはグラムと呼ばれている「村」の組織性は、果たして農村開発計画の受け皿として耐えうるものであるかどうかという関心を抱いた。本稿はこのような問題意識を土台として書かれた、筆者らの村落調査の体験に根ざしたベンガル農村の組織性についての覚え書である。

本稿では、ベンガルデルタ開拓、調査村落

*京都大学農学部; Faculty of Agriculture, Kyoto University, Kitashirakawa, Sakyo-ku, Kyoto 606, Japan

の立地形成および集落構成世帯の家系史を考察することにより, 農村の組織性の観点から村落形成史を素描した上で, ベンガル農村の組織性を支えているのはパラと呼ばれる自然村的小集落であることを指摘し, 農村開発におけるパラの今日的意義を述べる。

I 自然村的小集落=パラの形成過程¹⁾

I-1 19世紀後半ベンガルデルタ開拓小史

S. Islam は, ベンガルデルタの開拓は19世紀に進展し, 1870年代を開拓の最盛期としている [Islam 1988: 35]。1870年代頃を境に大雑把に二つに分けて考察することができる。人口規模が平方キロ当たり160人程の安定的水準に達し, それが上昇を開始したのが1870年代の時期であったといえる。²⁾ この変化は, 植民地統治による治安維持がある程度達成されたということを背景に, 地代収入の増加を意図したザミンダールが, 従来の居住空間から遠距離にあり人の住まなかった低湿地やチャール (大河川の河床や河口に形成された砂州) などの入植を奨励したことによる。従って, 19世紀後半に開拓された地域は, 人が居住し, 農業を営むには比較的条件的悪かった土地であった。S. Islam は, それらを(1)チャッタゴン地域の未開・荒蕪地のノアバダ, (2)チャール, (3)ビール (沼沢地), (4)シュンドルボン (ベンガル湾に面したマングローブ林地帯) の四つに分類している [Islam 1988: 47-73]。大陥没地域 (ハオール), ベンガル湾に面し潮汐の影響で塩害を受けるシュンドルボンのジャングル地帯等は開拓の手が伸びなかったが, チャール地やビール地には, 自然堤防上に発達した古い集落から押し

出され, 分村する形で19世紀末までには人の居住する場となっていた。氾濫による冠水を常に免れている安定した自然堤防上には常設の市を持つ町や規模の大きい集落が存在する。19世紀後半における開拓のフロンティアであった条件の悪い低湿地は, こうした古い親村から分村した家族が, 土を掘り, それを盛り上げて屋敷地を作り居住する場としていった [Govt. of India 1913: 43]。

紅河デルタを例外として, 東南アジアの他のデルタの大部分が比較的新しい時代まで全面的に利用されることはなかった。これと比較するとベンガルデルタ開拓の特色が明瞭となる。例えば, メナムデルタの場合は, 上流部の山間盆地が最初に開拓され, 中流部の氾濫原と扇状地・段丘複合へと進んだ。下流部の新デルタ部の開発は, 19世紀後半に大規模な土木事業に支えられて初めて着手された [高谷 1975: 28-57]。このような開拓史を持つメナムデルタと異なり, ベンガルデルタは, 早くから全域に広がった人口集中地点を持ち, そこをセンターとして低湿地, 未開・荒蕪地への開拓が進行するという過程が始まっていた。³⁾

1722年においてベンガルには, ザミンダール⁴⁾の農民支配の拠点であり, 人口集中地点

- 3) 東南アジア大陸部のデルタ開発に見られる人口動態はベンガルデルタを考える上で示唆に富む。「域内の人口が一定の増加率さえ保有すれば, 若干の外部移民を加えつつもこれらをもまた自己増殖の源としてとり込み, 主として自己膨張によってデルタをうめつくすことが可能であった。デルタ自体が巨大なものであったから, 新村がたえず形成され, そこには域内といってもかなりの距離を移動した人が住みついていったに違いない。穀倉として成立していく地域であるから, 食料供給は十分であり, 乳児死亡や伝染病さえ顕著でなければ, 増殖は幾何級数的になり得たのである」 [坪内 1986: 123]。
- 4) ザミン=土地, ダール=人の意のペルシア語が起源。農民から地代を徴収し, 地租を国家に納めることにより土地の所有権を保持している者をいう。イギリスは1793年にベンガルにおいてザミンダールに土地の所有権を認めたと

1) 本節は [安藤・河合 1989] を加筆修正した。
2) 人口の分布は, 最初の1872年センサスまでには全ベンガルレベルではほぼ均等に広がり, 一平方キロ当たり116人以下の警察管区は例外的なものとなった [Govt. of India 1923: 11]。

表 1 バングラデシュ現在の行政機構

	行政単位の数	各単位の平均人口
管区 (Division)	4	22.48百万
旧県 (旧District)	21	4.28百万
県 (旧Sub-division)	64	1.40百万
ウポジラ (Upazila/Thana)	492	182.7千
ユニオン (Union)	4,401	20.4千
モウザ (Mauza)	60,315	1.5千

出所) Bangladesh Bureau of Statistics [1989:3]。

注) 人口は1981年センサス。

を持ったパルガナが1,660存在していた。⁵⁾ このパルガナの数、インド・西ベンガル州を含んでいることを考慮しても、表1に示される現在のバングラデシュのウポジラ(英領期の警察管区、現在では県の下の方行政区=郡、後述)数より多い。1722年においてパルガナの人口集中地点が、現在のウポジラ中心地の分布以上の密度で形成されていたことになる。

地租調査 (Revenue Survey) 時の記録によれば、1850年代には旧シレット県、マイメンシンにまたがるハオール地域、旧ダッカ県、マイメンシン県に広がるモドプール・ジャングル地域、旧クルナ県のシュンドルボン、メグナ川、ジョムナ川沿いのチョール地域を除くほぼ全域に集落が形成されていた。同記録によれば現在のユニオン(行政村、地方行政の最小単位、後述)に相当する区域内にも人口の集中地点が分布していたことがいえる。

具体例をあげよう。ダンガイル県の調査村

↓(Permanent Settlement)。英領期の土地所有権の在り方を要約したものとして中里 [1989: 1-14] がある。

5) パルガナはムガル帝国期の徴税の単位で、ベンガル Subah は19の Sarkar に分かれ、その下に Pargana が置かれた。ムガル帝国期のベンガル Subah では、1582年から1722年にかけてパルガナの数が684から1,660に増加した [Beams 1986: No. 1: 83-136, No. II and III: 743-765]。

は、現在常設市場が設けられているエレンガ・モウザの市場圏に含まれる。その市場圏の中心地には1885年2月の調査時に119家屋(内レンガ造りの家屋1)が存在していた。インディゴの加工工場が一つ存在していたこと、定期市がたっていたことが調査時に作成された地図に記されている。レンガ造りの家屋は、調査村のザミンダールであったエレンガ・タルクダールの住居であった。もう一例を挙げよう。当時すでに旧マイメンシン県の中心地であったマイメンシンの町はアラブシン・パルガナに属し、通称ナシラバードと呼ばれていた。ナシラバードはセウラとシェフルの2モウザからなり、当時の市街地で現在のカントンメント(軍駐屯地)地区には591の家屋(内30はレンガ造り)が存在し、9の家屋にはヨーロッパ人が居住していた。二つのモウザの人口は合わせて5,882人であったと記録されている。マイメンシンの町は例外的な規模であったとしても同時期のパルガナ・レベルでの人口集中地点の形成がこのことから理解される。⁶⁾

以上の開拓史のアウトラインにおいて集落の社会組織はいかなる性格を持つのか。ドッキンチャムリア村とオストドナ村の二つの調査村の事例を素材として述べたい。

I-2 ドッキンチャムリア村の事例

I-2-1 村落景観

ジョムナ川分流ロハジャル川の氾濫原に位置する調査村ドッキンチャムリア村の原型は、図1に示されるように、自然にできた窪地(ビール)を持った集落であった。Revenue Survey 当時1851年に作られた当該地域の地図には、集落と主要な道路と河川、池、ビールとが記されている。この地図に描かれ

6) 旧沖積段丘バリンド台地に位置する旧ロングブル県では、1807-14年の資料を基にした谷口晋吉の推計によれば、半径2マイル強の円周内に週一回の週市の立つ市場地が平均一個存在した [谷口 1987: 90]。



図1 ドッキンチャムリア村周辺の地形図
出所) Revenue Survey 地図, 1851年。

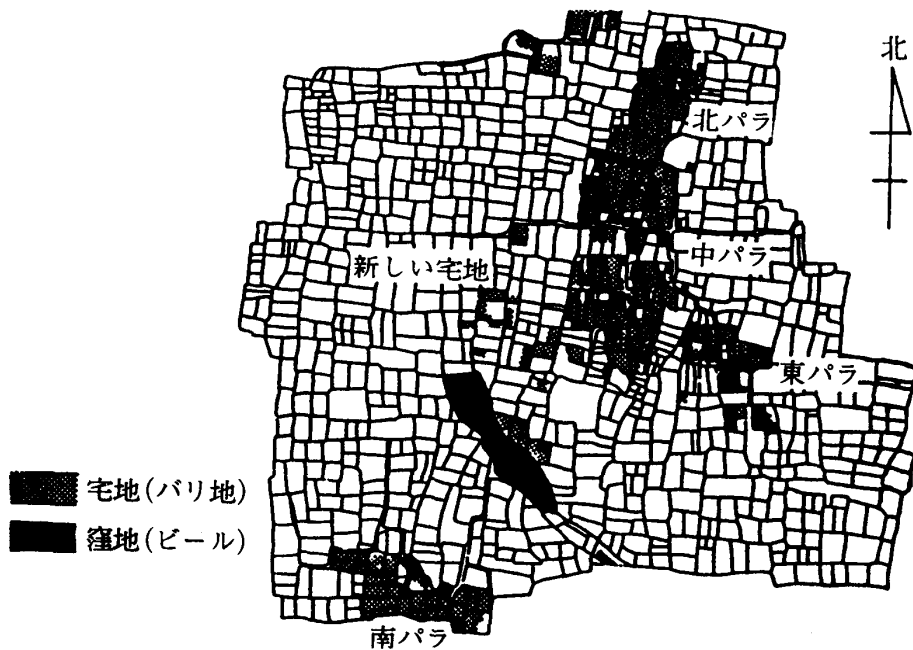


図2 ドッキンチャムリア村

た集落と河川の分布状況は、この地域の集落が河川によって造られた微地形を上手に利用して立地していることを見事に物語っている。当該モウザには、1851年当時いくつかの小集落が存在し、各々の小集落は近くに池または、ビールと呼ばれる窪地をもつか、もしくは川に近接していた。1910/11年の調査(Traverse Survey)による同地域の地図には、1851-1910/11年間の河川の変化が記され、堆積作用によって出来た新しい土地(チャール地)に争議の訴訟番号が記されている。新しく出来た土地の耕作権、所有権をめぐって植民地政府民事法廷で頻繁に争われたことがわかる。現在の集落の位置は、基本的にこの二つの地図と大きく異なっていない。

雨季には、2-3メートル高くなった屋敷地塊(バリ、後述)を除けばすべての土地は水没し、屋敷地塊の間は川となって流れる。この川が生活用水として使われる。村人は水浴し、食器を洗い、洗濯をする。屋敷地塊から屋敷地塊への往来は小舟以外にない。屋敷地塊には最低一つのノカと呼ばれる小舟があり、複数のバリから形成されるパラと呼ば

れる小集落の際には2-3の小舟が繋がれている。この屋敷地塊の外では、胸や腰まで水に浸かってジュートの皮剥ぎをしたり、小舟から投網を打ったり、大きな四つ手網で魚をとる光景が展開する。巨大な川の中に、屋敷林で囲まれた小集落が離れ小島のように浮いている。これが雨季の景観である。乾季には、池やドバ、ビールといった窪地にのみ水が残りそれ以外の土地からは水が消える。このように雨季と乾季とではきわめて異なった水文環境下におかれている。

I-2-2 自然村の小集落=パラの形成史
同村には、ウットール(北)、モッドム(中)、プルボ(東)、ドッキン(南)の四つのパラがある。四つのパラは図2のように分布している。モッドム・パラはバリの集合として一まとまりの集落を形成していないようにみえるが、1851年当時や1911/12年当時の地図によれば、複数のバリの集合としてまとまりを持っていた。モッドム・パラにおいて古い小集落から離れた所に出来た新しいバリは、1960年に作られた一つのバリを除いて全て1970年代以降に出来たバリである。1987年

と1988年の二度にわたり同村は床上浸水の被害を受けたが、被害を受けたのはこれら新しいバリであった。新しいバリは水文環境が劣悪な場所に作られているのである。新しいバリの集っている周辺の土地は、1911/12年の土地分類によると大半は当時ナマ地と呼ばれていた低地であった。水文環境が劣悪であったために、これらの土地は以前には屋敷地としては使われていなかった。人口の増加によって低い土地においても土を盛り上げて屋敷地を作り家屋を建てざるをえなくなっているのである。

集落形成史という点から要約しよう。氾濫原における小さい凹凸は、雨季の氾濫時に浸水から免れる屋敷地を提供し、ビールやプクール等の窪地に溜まった水は生活用水として乾季に利用されていたようである。

大きな自然堤防が存在しない同地域では小集落の規模および配置は自然堤防に規定されるが、1851年には今日の村の原型である複数の小集落が小さな自然堤防上に出来ていたのである。川筋で、しかも後背湿地でないところから、水文環境と土壌条件に恵まれ、1970年代前半の乾季に灌漑によってボロ（乾季作水稻）作が導入される以前においても、乾季に種々の作物が作られてきた。1960-70年代にかけての人口急増の結果、屋敷地に適した小自然堤防の領域をはずれて低地に屋敷地が広がっていった。これらの新しい屋敷地は、必然的に洪水の被害を受け易い環境下にあり、近年における洪水による被害の増大はこのような新しい開発を反映しているものである。

II 集落単位としてのパラの特徴：ドッキン チャムリア村の事例⁷⁾

II-1 Settlement の単位

村の広がり (Settlement) に関して、ドッ

7) 本節に関しては別の視点から安藤和雄による別稿が予定されている。

キンチャムリア村の人達が持っている区分は、ゴール (Ghar)、バリ (Bari)、パラ (Para)、グラム (Gram) である。ゴールは人が住んでいる建物そのものを意味する言葉である。従って、家を呼ぶ時住んでいる人の名前を冠して、例えばアッケルのゴールなどと呼ぶ。⁸⁾ バリはゴールの集まったものである。バリは一続きになった屋敷地塊で、数軒から十数軒のゴールから成り立っている。バリを呼ぶ場合、多くはそのバリで有名になった人の職業 (例えば先生である Master を用いて Master バリ)、過去に住んでいた一族の名 (例えば Talukdar バリ) 或いは村の地域名 (例えば Chaker バリ) 等と呼び名としている。バリとバリとの間は雨季には氾濫水で埋まり、バリ間の往来には小舟が使われている。しかし隣のバリとは大声で会話を交わすことが出来、遠目に相手の顔を確認できる距離にある。パラは数個のバリの集まりに対して使われる。パラは、竹藪や木々で覆われていて、離れて眺めると一面の氾濫の海に浮かぶ小島のような景観となる。パラとパラとの距離は相当離れていて大声をだしても話を交わすことは不可能である。屋敷林が人影を包み、人を確認することは困難である。こうした距離では、一つのパラと隣のパラの住人との間に日常的な地縁的關係は成立し難い。⁹⁾ グラムという広がり、日常的な地縁的つながりの深さと関係しているように思われる。同村は四つのパラが一つの「村」を作っているが、人によっては南のパラと他の三つのパラは違うグラムであると意識する場合がある。これには三つのパラ同士間の距離に比べて、この三つのパラと南のパラとの距離は大きく、雨季には全くコミュニケーション

8) 家族の意味では Paribar が、世帯の意味では Chura または Khana が用いられる。

9) 原 [1969: 113-114] は同様な視点からチッタゴン地区の調査村の集落形態をエコロジーとの関連で説明している。

表2 ドッキンチャムリア村のバリとグシュティ関係

バリ名	グシュティ数	北パラ	中パラ	東パラ	南パラ	世帯数計
Bag	5			31		31
Baro	2		9			9
Bhhiyan	1			1		1
Chaker	5		9	8	1	18
Doctor	5	2			4	6
Dofadar	1		1			1
Doherpar	3				26	26
Faker	3			11		11
Haji	2				5	5
Halat	2	6				6
Jahadi	1	10				10
Jalufaker	2			4		4
Kantar	2		5			5
Khandaker	2	15				15
Master	3		11			11
Member	2		4			4
Molla	2	21				21
Mondal	7	33	26		11	70
Monshi	9	19	36	3	16	74
Naya	2		10		7	17
Panasuta	1	4				4
Shaek	2		5		14	19
Shikdar	1				4	4
Sunata	5		11			11
Talukdar	1	3				3
合計		113	127	58	88	386

出所) 安藤和雄, 1989年調査。

注) 同名のバリが異なるパラにある場合は, それぞれ異なるバリである。

ンが途絶えてしまうことが関係していると思われる。モウザ (Mauza) とは, 英領期に地租行政上導入された単位で, 地図によってその領域が明確にされ, 地籍台帳 (Khatian) によってモウザ内の一筆毎の地籍の所有者が確定されている。モウザが耕地を含めて明確な領域を持つのに対して, グラムという言葉は人の住む屋敷地の集合を主に日常的な距離感を意識して使われるものと考えられる。

II-2 父系血縁集団 (Gusti) と Settlement

バングラデシュの他村と同様に, 村内で血縁集団として意識されているのは, 父系血縁集団であるグシュティ (Gusti) である。グシュティが意識される理由の一つは, 土地相続の在り方と関連している。土地は父方, 母方の両方から相続される。イスラム法では男女の相続比は2対1である。女子は他家に嫁いでも, 相続した土地に対する権利を主張できるはずであるが, 聞き取りによれば, 実の兄弟に耕作させ, 最終的には所有権も譲りわ

表 3 ドッキンチャムリア村のパラ別グシュティ分布表

グシュティ名		北バラ	中バラ	東バラ	南バラ	世帯数計
Ansari	1		40	1		41
	2		17	2		19
Faker			5			5
Kandaker	1	15				15
	2		1	11		12
Molla	1	25	1			26
	2				1	1
	3				23	23
Mondal	1	1	10			11
	2	37				37
	3		3			3
	4		16	1		17
	5				12	12
	6				3	3
Pramanic	1	29		4		33
	2	1				1
	3		10			10
Shaek	1	4				4
	2		9	6		15
	3		2			2
	4		5			5
	5		8			8
	6			12		12
	7			3		3
	8			9		9
	9				16	16
	10				29	29
Sharkar		1				1
Shikdar	1			9		9
	2				4	4
合計	30	113	127	58	88	386

出所) 安藤和雄, 1989年調査。

たす場合が多い。Jansen は, これは女子が実家から庇護を一生受けるための知恵であると説明している。¹⁰⁾ 従って, 相続によって

10) Jansen [1987: 66-67]。また男子の相続者がいない場合婿取り (Ghar-Jamais) も稀でない [Jansen 1987: 82]。

11) 土地の父系血縁集団への集中の契機になるのは, イスラム法による相続の他に先買権の存在も重要であることが指摘されている [原 1969: 115; 1979: 6-11]。

土地は男の兄弟に集中しやすく, 嫁入り婚であることから代々の兄弟を中心に土地を核にした父系血縁集団が構成されるのである。¹¹⁾

次にこの土地を媒介にしたグシュティ集団の分布とその住居の広がりを見る。表2は, パラ内のバリとグシュティとの関係を見たものである。表3はグシュティのパラ毎の集中度を示すものである。表2より次のことがわかる。一つのバリが複数のグシュティから成

る場合があるが、グシュティの数は2-3の場合が多い。同表からは明らかではないが、実際はある特定のグシュティが複数のバリにまたがって分布している例がみられる。このことから同村においては、バリは父系血縁関係にしばられているとは言えない。表3から読み取れる重要な点は、特定のグシュティは特定のバラに限定されるという点である。村から出ていったヒンドゥー教徒の屋敷地を購入したなどの特別な例を除き、特定のグシュティが複数のバラにまたがって居住してはいない。この村においてバラは父系血縁関係＝グシュティを地縁的に維持してきた広がりであると特徴づけることができる。

II-3 居住地＝耕地ブロックとしてのバラ

上述の様に近年、人口の急増によって古いバリから離れて新たな家屋が耕地の中に多数作られた。これら新しい家屋がどのバラに対して帰属意識を持っているかは、単にバラとの距離の遠近では決定されていないようである。ロンガイ・ドホと呼ばれるビールの北側に位置している屋敷地塊は距離的に中バラに近いのであるが、ここの数軒の家は、南バラへの帰属意識を持っている。バラを構成する世帯が所有する耕地は一ブロックとして固まっている。単に屋敷地の距離のみでバラへの帰属意識が決まるのではなく、バラが所有する耕地は塊になっていて、そこに耕地を持つということが帰属意識を決めているということが出来る。1911/12年の地籍図では各バラの耕地所有の分布は現在以上にブロック状をなしている。従って、バラは、単に屋敷地の集合ということではなく耕地をブロック状の塊として持ち、複数の父系血縁集団を核にした地縁関係を発達させた最小の集落社会単位であると性格づけられる。

現在機能している様々な集団の領域がバラに限定されていることがこのことをよく物語っている。例えば、マティ・カタ・ドールと

呼ばれる道路工事や屋敷地の土盛の仕事をする日雇い労働者の集団は、バラを単位にしている。村の紛争調停役であるマタボールは各バラ毎に存在し、バラを越える紛争解決が必要な場合にはこのマタボールの複数合議制による「村」レベルのビチャールと呼ばれる寄り合いに持ち出される。バラはモウザやグラムに見られない集団としての結束力を持っている。¹²⁾

以上のことから自然村の小集落＝バラについては、以下の推論を行うことができる。バラは、一ないし二の少数のグシュティが入植したことによって開かれ、これが初期の開拓集落を形成した。以降、次第に地縁的関係のネットワークが広がった。この広がりがバラに限定された理由は、開村当時の草分け的グシュティの土地所有の広がりと同環境によって決定された屋敷地塊の立地条件によるものであると考えられる。

III 移住と集落形成：オストドナ村の事例

III-1 集落の概況

ベンガルデルタ集落の形成過程は、開拓家族の移住とある地域における定住という状況を設定して考えるとよく説明しうることがある。開拓集落の構成者は、同一の屋敷地塊（バリ）に居住する一ないしバリを異にする少数の父系血縁集団（グシュティ）であったと考えられる。

家系を聞き取りで知ることが出来る比較的新しいオストドナ村を事例としてこの点を述べる。開村の年代は両村とも不明であるが、現在住んでいる家族の祖先が当該の村に住み始めた時点は、ドッキンチャムリア村の方が古い。ドッキンチャムリア村でみた小集落＝

12) 旧ダッカ県の Sinaba 村のモノグラフにおいてもバラを越えたレベルの決議が必要な時には各バラから最低一名の代表がでることが報告されている [Barman 1988: 61]。

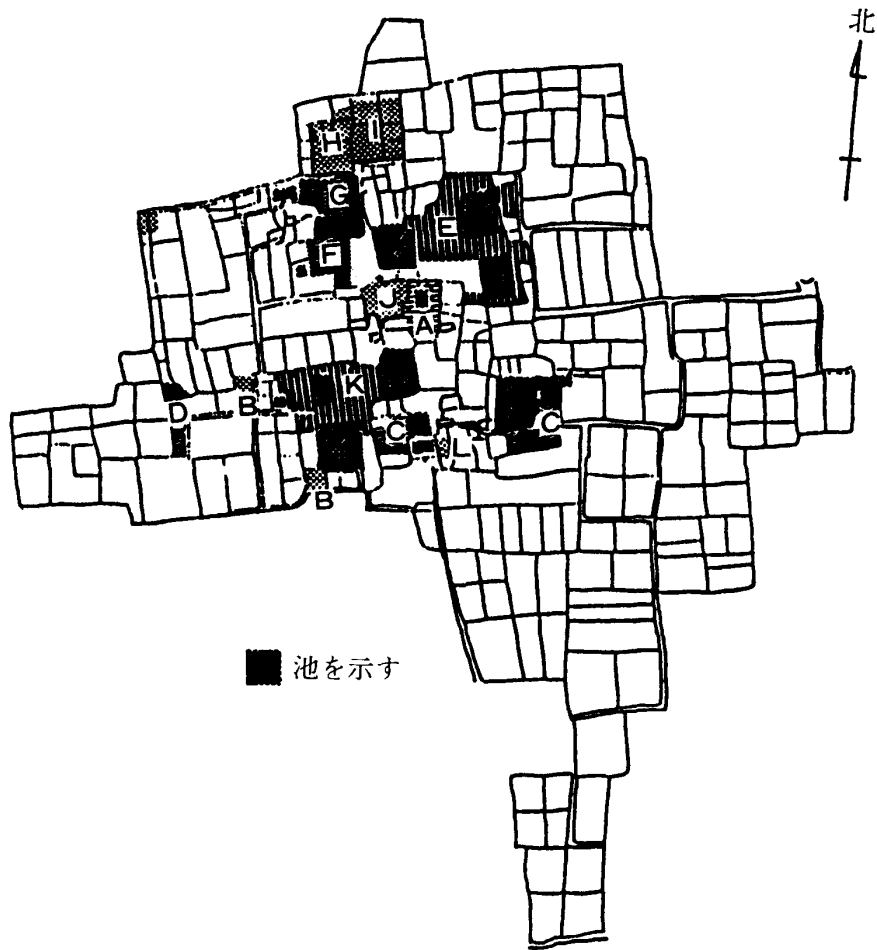


図 3 オストドナ村の屋敷地

パラの形成は，単一のグシュティの草分けによる場合と複数のグシュティが同時に草分け的役割を果たした場合があったと推定されるが，その後有力な草分け的グシュティの影響下に他の弱小のグシュティが新たに移住し，パラが拡大し，地縁的関係が強まっていったものと考えられる。

これに比べて歴史が新しいオストドナ村の場合は，前後して移住した三つの有力なグシュティが草分けであったことが明らかである。オストドナ村は，旧ティッペラ県（現在コミラ県）の旧メグナ氾濫原ティッペラ面に位置する。この「村」を村人はパラとは呼ばないが，以下で示す如くドッキンチャムリア村におけるパラと同様の形成史を持つ。¹³⁾ オストドナ村の場合，1861-65年の資料によれば

家屋数10戸，ムスリム人口35人，ヒンドゥー人口15人となっている。1861-65年の調査時点のムスリムの子孫が現在この村に住んでいるムスリムである。彼らの祖先は，メグナ河口にあるジョンデーブ島から洪水を逃れて，おそらく19世紀の半ば頃にこの村に移住した。その時点で既にヒンドゥーの家族が居住していたという。このことは，1915-19年の地籍台帳にヒンドゥーが所有していた地籍2筆が確認されることから，少なくとも地籍台帳が作成された時点で屋敷地と耕地を持ったヒンドゥーの家族が存在していたことは明らかである。

13) パラという単位を捉える基準は，(1)集落の settlement の形態，(2)草分けの父系血縁集団の居住形態，(3)居住地=耕地ブロックの状況等である。

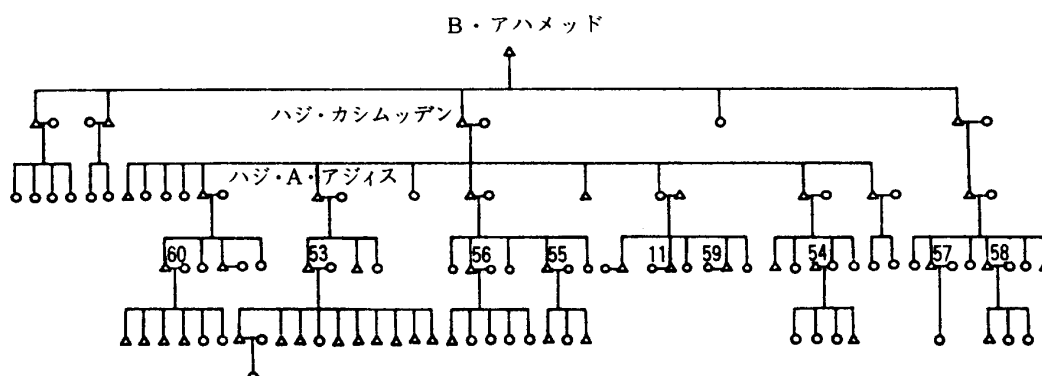


図4 Kグシュティ家系図

かである。現在この村にはヒンドゥーの家族は皆無である。ヒンドゥーの家族が徐々に村外へ出て行き、新しいムスリム移住者達が集落の中心的存在となっていたことは確実である。この村では19世紀の後半に集落の構成が何らかの理由で変化を被ったといえる。¹⁴⁾

図3は、同村の現在の12のグシュティの屋敷地塊の位置を示している。B及びDのバリは小集落から離れている。これら二つは、近年他所から流入し、住み始めた家族のもので、同集落中央の屋敷地が集中している高みに住居を構えることが出来ず、周辺の低い所に盛り土をして家屋を建てている。ドッキンチャムリア村の場合と同様、低地に新しく建てたバリは1988年の洪水時に床上浸水を被った。

III-2 移住と集落の形成

この12のグシュティの中で草分けというべきグシュティが三つ存在する。この草分けであるC, E, Kの三つのグシュティの中でEグシュティは今世紀の始めに隣村から分家してこの村に住み始めたものである。CとKグシュティの祖先は、ジョンデーブ島から同地に移住した。Kグシュティの場合は近くの他の

村に一旦移住し、ついで同村に移住した。CとKグシュティとの間の血縁はたどれないが、出身地は共通している。図4は、Kグシュティの系図である。表4は、グシュティ別の人口、土地所有状況等を示す。Kグシュティは7世帯からなり同村人口466人中約23パーセントを占めている。また土地所有においては、Kグシュティ所有地合計が村所有面積の約25パーセントとなる。現在ではKグシュティが群を抜いて強力である。しかし移住した当時に今日程の影響を持っていた訳ではない。

ジョンデーブ島からの他所者が住み始めるようになると半キロ程離れたドニヤモリ村を拠点にこの地域一帯に強い影響力をもつブンヤー族が、主に親村における屋敷地不足と、新たに進入してきた他所者に対抗しブンヤー族の影響力をこの一帯に維持する狙いをもって分家(Eグシュティ)してきた。¹⁵⁾ブンヤー族が屋敷地にした場所は、1850年代の人口に関する資料で確認されるヒンドゥーの屋敷地の一つであったと推定される。しかし、1915-19年の地籍台帳では同村の屋敷地塊の中心部に位置しているこの広い屋敷地はヒンドゥーの手を離れ、Eグシュティの所有となっている。ヒンドゥーが村を去った理由は明らかで

14) Bertocci [1970: 43-55] は、コミラ県の調査地域では1870年代以前に比較的遠距離から移住がみられ、1870年代以降はそれらの父系血縁集団が定着し、近距離に血縁のネットワークを広げていったことを明らかにしている。

15) ドニヤモリ村のブンヤー族は約2キロ程西の Chakra mauza に発祥の地を持つという。

表 4 オストドナ村基本統計表

	グ テ シ ユ	世帯数	バ リ	人口	農 地 (エーカー)		役畜数	世帯主の職業				計
					所有	経営		農業	農業関連	非農業	他	
I	K	7	1	59	17.61	18.18	5	4	0	3	0	7
	C	15	4	101	19.10	17.86	13	9	0	5	1	15
	A	2	1	14	3.09	3.09	1	1	0	0	1	2
	D	9	2	40	0.78	1.74	0	2	5	2	0	9
	B	3	2	29	0.66	1.26	3	1	0	2	0	3
	L	3	1	20	0.25	0.42	0	0	1	1	1	3
計		39	11	263	41.49	42.55	22	17	6	13	3	39
II	E	10	2	66	11.44	17.97	14	9	0	1	0	10
	J	2	1	17	3.00	2.88	1	1	0	1	0	2
	F	6	1	28	8.18	8.33	3	3	1	2	0	6
	G	2		21	5.28	4.89	2	2	0	0	0	2
	I	7	1	32	6.02	3.01	2	2	0	5	0	7
	H	7		39	1.85	1.72	1	1	0	6	0	7
計		34	5	203	35.77	38.80	23	18	1	15	0	34
計		73	16	466	77.26	81.35	45	35	7	28	4	73

出所) 河合明宣等，1987年調査。

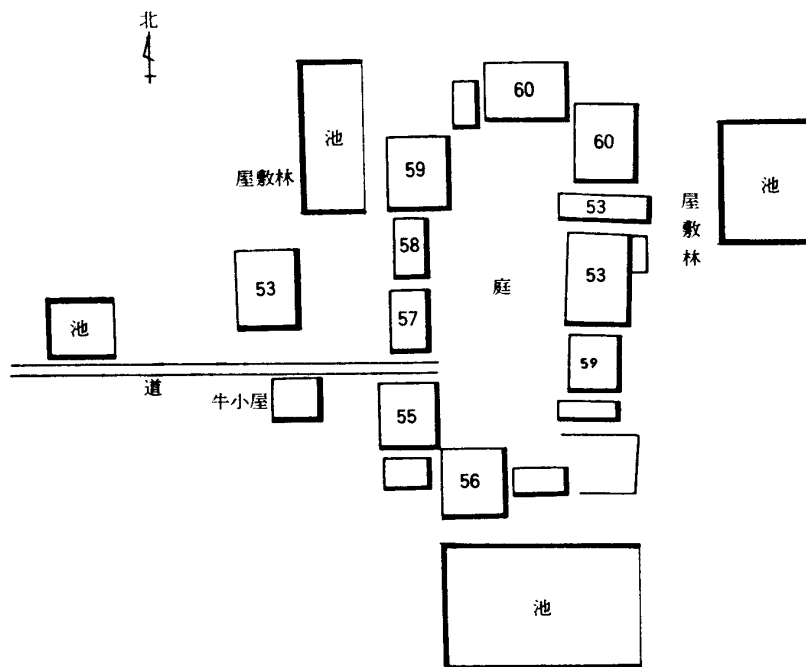


図 5 Kグシュティの家屋配置図

はないが、この時点までに屋敷地と耕地のブロックはそのヒンドゥーの手を離れていたことが知れる。

KグシュティとEグシュティとの対抗がこの小集落のまとまりを分断した。Eグシュテは地域一体に広がるブンヤー族の勢力を背景

に侵入者に対抗した。一方他所者であるKグシュティは後に流入した土地無し家族に小作地を与えたり、家敷地や墓地を提供して、この小集落での影響力を増大させていった。自作地主的農業経営をする一方で1910-20年代のジュートブーム期にジュート仲買をしたように、機会をとらえて非農業部門にも従事し、その収益を土地購入にあてた。

図5は、Kグシュティの屋敷地の家屋配置図である。ビンロウジュを中心とする立派な屋敷林を持っている。ココヤシ等が繁る土手に囲まれた、掘り上げて造った大きな四角い池が幾つか存在する。池のすぐ近くに共通の庭を囲む形で家屋が建てられている。この屋敷地内には血縁を持たないものは住んでいない。図中の家屋番号は図4の世帯番号に対応している。番号53の世帯の戸主がこのグシュティの長である。Kグシュティは、現在の戸長ハジ・A・アジス氏の力量によって地元勢力ブンヤー族に対抗して成長することができた。氏はユニオン評議会議員に数度選出され、このユニオンの行政上重要な地位にあった。また財産相続、夫婦・兄弟間の争い等の紛争の際、同村のみでなく他村に向いて調停者として紛争の裁定をしている。これは議員を退いた現在でも変わっていない。彼の息子は、88年の選挙でユニオン評議会議員に選出された。

表4より、この村では大半は1バリー1グシュティという構成で、屋敷地塊であるバリに父系血縁者が居住していることが分かる。¹⁶⁾しかしCグシュティは4つの屋敷地に分れている。このグシュティは同村のイスラム人口中では歴史が最も古く、世代交代を経るうちに同一の屋敷地内に宅地が確保され

ず、分散した形で住居を構えるようになったものであろう。居住の時間が経過するにつれドッキンチャムリア村で見たように混成グシュティのバリが増加していくものと考えられる。これは、地縁関係が時間の経過とともに強化・拡大することとも解釈しうる。この他に同村のほぼ中央にあるモスクやマドラサは地縁の関係を補強するのに役立っている。現在、農村開発行政の進展にともなう外部からの動きに対して農業協同組合の設立準備が進行しつつあるが、この場合にもグシュティ間の対立が顕在化せず、バラ集落的結束がみられる。ここにも地縁関係の増大傾向を指摘することが出来る。

結び——農村開発におけるバラの 今日的意味

バラ集落の形成過程をふりかえったが、このバラが今日どのような意味をもつか考えてみたい。

植民地統治がベンガル農村社会に与えた直接的インパクトは、植民地行政機関による地租収奪と統治を継続するための治安維持の二側面に限定されていた。地租に関しては、農村社会に在地の支配力を持つザミンダール層を植民地統治体制に組み込み、彼らに徴収を依存した。統治の要である治安維持に関しては、農村社会に警察管区制(Thana)に基づく警察行政を導入した。警察行政と地租行政とは県(District)レベルで統括され、郡(Sub-division)がその補助的機能を担った。このように英領期ベンガルの地方行政は、植民地支配最大の目的である農村からの剰余の収奪をザミンダール層に依存したため、植民地行政機関そのものによる農村社会の掌握は、点的に確保された治安維持の側面を除けば、著しく弱いものとなった[Govt. of Bengal 1915: 87-161]。

しかし農村社会の内部に地方行政を拡大し

16) 父系血縁集団の集団としての機能については今後の課題である。原[1969: 119]は、「*gusti*の組織が著しくルースで、さして村の生活で重要な役割りを果たしていない」という理由で、*gusti*を父系血縁「集団」と呼ぶことを避けている。

ようとする試みは警察管区制を足がかりとしつつ徐々に始められた。まず集落で警備の役割を担っていたチョキダール (Chaukidar) が警察の管轄下に入った。1870年のチョキダール区 (Chaukidar Panchayat) 制は、警察管区と個々の集落の中間の管轄区を定め、何名かの役員に集落のチョキダールに対する一定の監督を委ね、管轄区に費用の負担をさせることで警察行政の組織化を計ったものであった。一方、集落の自治的機能を地方行政の末端に結びつけようとする試行は、1883年ユニオン委員会 (Union Committee) 制導入に始まり、1885年地方自治体法 (The Local Self-Government Act) によって法制的に強化された。この面での政策的努力は、1919年村落自治法 (The Village Self-Government Act) によるユニオン評議会 (Union Board) 制へと整備されていく [Alam *et al.* 1986]。

1919年法は、集落の自治的機能を地方行政の末端に吸収するために、1883年以来のユニオン委員会制を強化しようとしたものであった。これによって19世紀末から始まる地方行政整備の大枠が整った。要点は、警察管区制によって維持されていた幾つかの集落にまたがるチョキダール管轄区を基にしてユニオン委員会制によって達成しようとした政策的意図の貫徹を計ったものである。6-9人の議員の内3分の2は選挙によって選出するものとされ、ユニオン内の既存の社会関係を取り込む形式を整えた。ユニオン評議会制はこうして県の下で警察行政の末端と重なりながら地方行政の一部を担う輪郭を表しはじめた。¹⁷⁾

モデル的に提示されたユニオンの面積は6,000エーカー程度で人口はおよそ6,000-

表5 ベンガルで成立したユニオン評議会の数 (1914-1937)

	集落数	ユニオン区数	備考
1914	70,000	60	指名
1918	—	400	指名
1920	—	295	選挙
1921	84,981	1,600	選挙
1926	—	2,419	選挙
1937	—	5,046	選挙

出所) Ali [1982: 39]。

7,000人とされた。ユニオン区の機能として委譲されたものは、チョキダールの監督と必要経費の当区農民負担、農民の保健衛生、区内の道路および学校の建設・維持等であった。しかしながら、村落の自治的機能を地方行政の末端に吸収、組織化するという植民地政府の意図を全ベンガル諸県において実現することは出来なかった (表5参照)。1980年代初頭、ジアウル・ラーマン政権時に試みられた村落政府制 (Gram Sarkar)¹⁸⁾は、「村」を地方行政の末端に位置づけようとしたものであるが、短命に終わった。この試みを除けば、ユニオンを行政村にしようとする地方行政機構整備の基本的在り方には変化はなかった。

一方、地租行政に関しては次のようにいえる。植民地政府はザミンダール制に強く依存してきたが、19世紀中葉からは次第に地租行政を直接管轄下に置こうとする試みを具体化させる。それは、地図上に地籍を確定し、それに基づいて地代負担者を把握していこうという動きとなって現れた。このための事業としては、地租調査 (Revenue Survey, 1845-78) から地籍調査 (Cadastral Survey) にいたる全ベンガルの規模での二段階に分

17) バングラデシュにおける行政村の設定が、警察行政を基にし、従来の自然村の解体・再編統合という観点を欠いたことは、日本における地方自治制成立の事情と決定的に異なる。比較の観点から大石 [1990: 3-48] を参照。

18) ジアウル・ラフマン政権の導入した行政村 (ユニオン) の下位にある「村」レベルの自治機関をいう。この行政制度改革の評価について Huque [1988], 佐藤 [1990: 25-39] を参照されたい。

かれる土地調査の開始であった。Revenue Survey は、モウザとよばれる地租行政上の最小単位を確定したものであった。Revenue Survey 当時のモウザは集落とその耕地とからなる一塊のブロックであったと思われる。¹⁹⁾ 19世紀末に始まる Cadastral Survey は、モウザ内の地籍、地籍の所有者、所有権の性格等を確定したものであった。しかし、人口増加によって居住空間が拡大している時期に行われた調査であり、モウザと集落＝耕地ブロックとの対応関係が極めて複雑なものとなった。ユニオンの下の単位であるモウザは、このように単に地籍を集めたものであり、集落で生活する人を把握する単位としての意味を持たなくなった。地方行政機構の末端の単位として植民地期に枠組みを整えたユニオンは、自然村の組織性をその内部に組み込む制度的仕組みを持っていなかった。²⁰⁾

個々の集落が持つ組織性および自治的機能を行行政村の中に吸収し、農村開発行政を活性化させていくには、自然村的小集落＝パラにもう一度注目する必要があると思われる。村落形成史の観点からのパラ集落の把握は、今日の農村開発行政の単位を考えるうえで重要な視点を提供している。

参 考 文 献

- Alam, B.A. et al., eds. 1986. *The Ordinances for Rural Local Bodies*. Dhaka: National Institute of Local Government.
- 安藤和雄；河合明宣. 1989. 「ベンガル・デルタ村落形成史ノート」『農業史年報』3.
- Ali, A.M.M. Shawkat. 1982. *Field Administration and Rural Development in Bangladesh*. Dhaka: Centre for Social Studies.
- 19) モウザの設定においてはザミンダール等の上級土地所有権が関係していた。この点は他日を期したい。
- 20) ウボジラを中心とする地方行政制度（ウボジラ＝ユニオン）改革の経済的および政治的背景の分析については佐藤〔1990〕を参照されたい。
- Bangladesh Bureau of Statistics. 1989. *Statistical Pocket Book of Bangladesh*. Dhaka: Bangladesh Bureau of Statistics.
- Barman, Dalem Ch. 1988. *Emerging Leadership Patterns in Rural Bangladesh: A Study*. Dhaka: Centre for Social Studies.
- Beams, Jone. 1986. Note on Akbar's Subahs with special reference to the Aini-Akbal. *The Journal of the Royal Asiatic Society and Ireland for 1986*.
- Bertocci, P.J. 1970. *Ellusive Villages: Social Structure and Community Organization in Rural East Pakistan*. Ph. D. thesis, Michigan State University.
- Govt. of Bengal. 1915. *Bengal District Administration Committee 1913-1914 Report*. Dhaka: National Institute of Public Administration. (Reprint ed., 1966.)
- Govt. of India. 1913. *Census of India 1911, vol. V: Bengal, Bihar and Orissa and Sikkim, pt. 2, Report*. Calcutta: Bengal Secretariat Book Depot.
- _____. 1923. *Census of India 1921, vol. V Bengal, pt. 1 Report*. Calcutta: Bengal Secretariat Book Depot.
- 原 忠彦. 1969. 「東パキスタン・チッタゴン地区モスLEM村落の親族名称」『アジア・アフリカ言語文化研究』2.
- _____. 1979. 「バングラデシュ農業開発の社会的基盤」『社会人類学年報』5.
- Huque, A.S. 1988. *Politics and Administration in Bangladesh*. Dhaka: University Press Limited.
- Islam, S., 1988. *Bengal Land Tenure*. Calcutta: K P Bagchi & Company.
- Jansen, Erik G. 1987. *Rural Bangladesh: Competition for Scarce Resources*. Dhaka: University Press Limited.
- 中里成章. 1989. 「ベンガルにおける土地所有権の展開」『歴史と地理』402.
- 大石嘉一郎. 1990. 『近代日本の地方自治』東京：東京大学出版会.
- 佐藤 宏. 1990. 「バングラデシュの権力構造——従属的軍・官僚国家における権力と権益——」『バングラデシュ：低開発の政治構造』佐藤宏(編)所収. 東京：アジア経済研究所.
- 高谷好一. 1975. 「稲作圏の歴史」『稲と農民』市村真一(編)所収. 京都大学東南アジア研究センター.
- 谷口晋吉. 1987. 「19世紀初頭北ベンガルの流通と手工業」『一橋論叢』98(2).
- 坪内良博. 1986. 『東南アジア人口民族誌』東京：勁草書房.